

## (第92回) 歌舞伎「歌舞伎座 130年吉例顔見世大歌舞伎」2018年11月19日

今回もアイアン・クラブの歌舞伎観劇は昼の部と夜の部を選べる趣向である。今回は夜の部を選んだ。昼の部の出席者は29名、夜の部の出席者は20名であった。

11月の歌舞伎公演は「顔見世大歌舞伎」と称する。江戸時代、役者の契約は1年契約であり、11月から翌年10月までであった。11月の興行は翌年1年間の顔ぶれを披露するという意味合いを持つ大切な興行で「顔見世大歌舞伎」と称されたことから来ていると言われている。因みに1月の興行は「壽初春大歌舞伎」、8月は「納涼歌舞伎」と言われている。「顔見世大歌舞伎」の夜の演目は「楼門(さんもん)五三桐」「文売り」「隅田川続弟(ごにちのおもかげ)法界坊」であった。

「楼門五三桐」は顔見世に相応しく人間国宝・中村吉右衛門丈と尾上菊之助丈の競演である。春爛漫の南禅寺の山門に石川五右衛門(吉右衛門)が姿を現わし「絶景かな絶景かな」の名台詞で幕が開く。一羽の白鷹が血染めの遺書を啜えて飛んでくる。これを読んだ五右衛門は実父(大明国の宋蘇卿)の仇が真柴久吉(菊之助)である事を知る。偶々、楼門に通りがかった巡礼が真柴久吉(史実の豊臣秀吉)であった。久吉は「石川や浜の真砂はつきるとも世に盗人の種はつきまじ」とこれまた歌舞伎界での名台詞を詠じる。

五右衛門は久吉に手裏剣を打ち込み、これを久吉は柄杓で受け止め、五右衛門と久吉が絵画のようにポーズを決め、幕は閉じる。薄墨色と極彩色の色彩美と楼門のせり上げに象徴される様式美満載で歌舞伎の原点ここにありとの感があった。



「文売り」は男女の良縁を願う恋文を売り歩く文売りを、中村雀右衛門丈が始めて演ずる。雀右衛門の舞台を観るのは今回が3回目である。清元の洒落たこの舞踊を演劇

評論家の上村似和於氏は日経新聞に「大人の芸を見せた」



と評している。

「隅田川続弟(ごにちのおもかげ)法界坊」は、悪党ながら憎めない法界坊が躍動する世話物の大作である。法界坊を演ずるのは今回が初役の市川猿之助丈。昨年の大怪我も癒えて満を持しての舞台である。



色と欲に溺れた生臭坊主法界坊(猿之助)は永楽屋のおくみ(右近)に恋慕するが、おくみは手代の要助(隼人)と恋仲で相手にされない。この要助は実は京都公家の嫡男松若丸で紛失した家宝「鯉魚(りぎょく)の一軸」を探すために身分を隠し、手代として働いている。上京した許嫁の野分け姫のお蔭で一軸を取り戻した要助だったが、一軸を盗みだし、一儲けしようとする法界坊に大事な一軸をすり替えられてしまう。おまけに、間男の疑いまでかけられてしまうが、その窮地は要助は道具屋甚三(歌六)に助けられる。一方、法界坊は野分け姫まで口説こうとするが抵抗され、殺してしまう。更におくみにも迫ろうとするが、甚三に邪魔をされてしまう。再三、事の企てを邪魔された甚三を恨む法界坊は「鯉魚の一軸」で甚三に襲いかかるが、逆に斬られ、川に落ちて力尽きてしまう。

隅田川の渡し場では、渡し守のおしず(雀右衛門)が要助とおくみをまっける。そこへ現れたのが野分け姫と法界坊の霊が合体した怨霊(猿之助)。要助たちに襲

いかかる怨霊に対し、おしずのさしだす尊像の功德に抗うことが出来ず、姿を消していく。

法界坊が二人の霊をひとりで演ずる舞踊双面(ふたつおもて)と幕切れに法界坊の霊が舞台上で宙乗りになるのが最大の見所である。

これがあらずじだが、暗い悲劇の様に思われるかもしれないが、実際にはユーモアがたっぷりあり、人情味溢れる歌舞伎ならではの上品な喜劇と言って良い。

猿之助丈は「オーソドックスに演じたいと思います。役者ぶりや愛嬌で見せる芝居ですが、コントになっても

いけません。そのさじ加減が難しいですね。」と語っている。前述の上村氏は「独自の工夫を怠っていない。双面(ふたつおもて)で本領を発揮。好舞台であった。」と評している。

歌舞伎通と思しき観客の声も紹介する。「大変良かったが、幕が切れず長くなり腰が痛い。」「猿之助さんの上達ぶりはお見事。でもすこし張り切りすぎかも。」いずれにしてもこれまでにない万雷の拍手で幕は降り、大盛況であった。

(織田 文雄・記)

以下余白